サンタ・ロサ信仰の形成と発展
―20世紀ペルー社会における展開を中心に―

文化科学研究科・比較文化学専攻　八木　百合子

はじめに

ペルーの守護聖人サンタ・ロサ（Santa Rosa de Lima）は、17世紀にアメリカ大陸で最初に聖人に列せられた人物で、今日ペルーで最もよく知られた聖人である。その信仰は彼女のゆかりの地リマのみならずペルー各地にも拡大しており、サンタ・ロサを守護聖人として祀る村も数多くみられる[1]。ペルー国家警察（Policía Nacional del Perú）の守護聖人にもなった現在、毎年8月30日のサンタ・ロサの日には全国の警察機関でもこの日を記念して祝祭が催され、サンタ・ロサ信仰発展の影には、教会だけでなく国家権力の存在も見逃せない。

本論文は、サンタ・ロサ信仰の発展をこの聖女をめぐる教会や国家の動きに焦点をあてながら考察するものである。したがって、ここでの視点は宗教的観点からではなく、この発展に影響を及ぼしてきた諸力の政治性に注目していく。これにより、サンタ・ロサ発展の背後にある諸要因を明らかにすることが本稿の目的である。

この聖女に関するこれまでの研究は、聖人伝研究（Millones 1989, 1991a, 1991b, 1992）や列聖の過程に重点をおく歴史的研究（Iwasaki 1993, Glave 1998, Graziano 2002, Hamp 1996, Millones 1993）が主流を占め、現代的な様相に光をあてた研究は、その名声に比べると意外に少ない。各地で行われる祭礼に関していくつかの事例の報告はあるものの[2]、多くの参拝者が集うサンタ・ロサの聖地についても一般的な概説程度の記述にとどまっている。そこで、ここでは主として文献資料にもとづき、とくにこれまでほとんど論じられてこなかった20世紀を中心に信仰発展の様相を描き出してみたい。

後述するようにサンタ・ロサは、18世紀の反乱の際に統合のシンボルとして登場したり、19世紀の独立やチリとの太平洋戦争（1879－1883）など、国家の歴史の重要な場面には愛国的な聖人として言及されてきた。こうした「国家的」な聖人が、20世紀ペルーの近代化や国民国家形成の歴史のなかで、国家や教会によっていかにして取り込まれ発展していったのか、こうした点を具体的に検証していくためにも、本稿では20世紀に着目することにする。

以下本論の前半部では、まず聖人伝をもとにして一般的に知られるサンタ・ロサについて述べたあと、列聖後に聖女がたどった歴史過程について簡潔に記す。後半では、それらが今日いかにして読み込まれていったのかという点に注目しながら、現代のサンタ・ロサ信仰の発展についての検討を行う。とりわけ、現在の信仰を支えてきた聖地と国家警察という二つの問題に着目し、当時のカトリック教会や政治状況に触れながら、サンタ・ロサ信仰発展の背景について考察する。

本論の後半部分では資料をもとに分析を行うが、ここで取り上げる資料のうち、”El Amigo del Clero” は、リマ大司教区が発行する月刊誌で、当時の教会にとって最も重要な出版物のひとつに位置づけられるものである[3]。そこには大司教や司教による公式文書、典礼から雑報にいたるまで教会に関するさまざまな公式見解が掲載されており、当時の教会の活動や教会、教区、聖職者たちの声明を知

ることができる。同様に、”Revista Policial del Perú”[4]もまたペルーの警察機関が発行する唯一の全国規模の機関誌であり、警察の活動や声明、日常の出来事を扱った小記事に加え、各地の警察機関の様子も記録されている。いずれも内部の声を聞く意味でも非常に価値の高い資料である。また、これに補完する形で一般的見解として新聞（El Comercio）や文化雑誌（Variedades）をも参考にした。

［図1］サンタ・ロサと国家警察
［Dirección de Información de PNP］

［図2］サンタ・ロサ祭礼の模様
（ペルー南部アレキパ県）

1.　サンタ・ロサの人生と列聖

本稿が対象とする聖人サンタ・ロサとはどのような人物なのかを示すために、本章ではまず彼女の人生と奇蹟、そして聖人として列聖されるに至った歴史について述べておこう。

1ー1.　サンタ・ロサの生涯

サンタ・ロサに関しては数々の聖人伝が残されているが、それらのなかでも最も古く、のちの聖人伝作者にも多く引用されたのがドイツ人のドミニコ会士ハンセン（Hasnsen Leonardo）の作品である。彼の伝記は、ドミニコ会の視点から書かれてはいるものの、多くの言語に翻訳され[5]、最も広く流布し［Millones 1989:892］、サンタ・ロサを広めるためにも多大な影響力をもったことからも、ここでは彼の著作［Hansen 1895］といくつかの聖人伝研究［Millones 1989, 1991a, 1993, Vargas Ugarte 1959, 2004］をもとにして、まずは一般的に知られるサンタ・ロサの人生について素描する。

サンタ・ロサ（本名イサベル・フローレス・マリア・デ・オリバ（Isabel Flores María de Oliva））は、1586年4月30日、スペイン人の両親ガスパル・フローレス（Gaspal Flores）とマリア・デ・オリバ（María de Oliva）のあいだに生まれたクリオーリョ（新大陸生まれのスペイン人）である。幼年期は父親の仕事の関係でリマの郊外にあるキベス（Quives）という村に住む。この地で当時のリマ大司教トリビオ・モグロベホ（Toribio Mogrobejo）から堅信の秘蹟を受け、以来ロサの名で呼ばれるようになる。ロサは数年間キベスに滞在したあと、リマに戻ってからは裁縫仕事をして貧しい家計を助けていた。また

幼い頃から自らに数々の苦行を課すが、彼女の苦行は周囲の者の反対を呼ぶほど過酷なものだった。ロサはドミニコ会のサンタ・カタリーナ・デ・シエナ（Santa Catalina de Siena）を自分の人生の手本にしていたことから、20歳になり貞節の誓いを立てると、彼女に倣いドミニコ会の第三会員に属す。その後は、家の庭に建てた礼拝用の庵で暮らすようになり、そこで一日のほとんどの時間を祈りのために費やし、隠遁者のような生活を送っていた。その一方で、彼女のもとへと訪れる貧しい人びとや病人の世話をも行い、その過程で病人のあいだに多くの奇蹟を起こした。27歳で病に陥ると、晩年ロサは、フローレス家が親しくしてきた友人ゴンサロ・デ・ラ・マサ（Gonzalo de la Masa）の家で暮らし、1617年に31歳の若さで生涯を閉じた。

以上がサンタ・ロサの人生であるが、こうした彼女の人生とそのなかで起きた数々の奇蹟が今日にも伝えられていることからも、次にサンタ・ロサの奇蹟について触れておく。

1ー2. サンタ・ロサの奇蹟

サンタ・ロサの奇蹟は生前にとどまらず、彼女の死後にも多くの奇蹟が伝えられている。しかしそうした数ある奇蹟のなかでも、今日でもよく知られ、本稿の後半部分の議論にも重なる2つの奇蹟について以下に述べておく。

ひとつは、ロサが苦行を行っている最中に起きた奇蹟で、それは次のような話である。

「ロサは苦行の際に、自らの身体に鎖を三重にして巻くと、鎖に南京錠をかけ、その鍵を井戸の中に投げ入れた。やがて痛みがロサを襲い、苦しみに耐えかねたロサの姿を見た召使のマリアナが、鎖を壊そうと石を探しに行った。しかし、不思議なことにロサが聖母マリアに祈りを始めると奇蹟が起こり、鎖はひとりでに壊れたのだった。」［Hansen 1895:64-65］

のちに述べるように、この奇蹟の舞台となった井戸は、現在聖所として参拝客を集めている。奇蹟の井戸は現代における信仰拡大に貢献しており、ここを訪れる人びとのあいだで今でも新たな奇蹟伝説が再生産され続けている。

いまひとつは、リマに渡来した海賊にまつわる話である。

「1615年リマの港町カリャオにリマの街や教会の破壊を脅かすオランダ人の海賊の一隊が現われた。このとき街中に警戒が広まると、副王は港へ軍隊を派遣するように命じ、オランダ船の上陸を阻止しようとした。これを知ったロサは、身に付けていた修道服の袖を肘までたくし上げると、取り出した剣で修道服の裾を切り、祭壇を守ろうとした。そして神のために闘い、命を捧げることを誓った。その後、海賊がサント・ドミンゴ教会に近づいているという噂が流れると、ロサはオランダ人によるキリストへの攻撃を自らの体に受けるべく、祭壇に登り自分の身を捧げる決心をした。すると、しばらくして海賊は北のほうへと向かって逃げていった。人びとは、海賊の破壊からリマを救うためにロサが命を捧げることを神に誓ったことによる奇蹟であると信じた。」［Hansen 1895:279-280, Vargas Ugarte 2004:73-77］

この奇蹟はロサの聖像にも見て取ることができる。教会堂や街中でみかけるサンタ・ロサの聖像はいくつかの形態があるが、その多くに共通する特徴は黒と白のドミニコ会の修道服に身を包み、薔薇

の花の冠を付けている点である。そしてほとんどの場合、胸に幼児イエスを抱いているが、それ以外にも薔薇の花や十字架、船の碇を手にした像も存在する。この碇は、上述したオランダの海賊からのリマ（あるいはペルー）救済の奇蹟を象徴するものである［Flores Aroz 1995: 256］。

碇を提げたサンタ・ロサは、聖像としてリマのサント・ドミンゴ教会やサンタ・ロサの家の礼拝堂などに置かれているほか、絵画にも描かれている[6]**［図3、図4］**。それらの聖像や絵画はおもに17－18世紀に制作されたものであり［Flores Aroz 1995］、ロサの死後にこの奇蹟が聖像としてモニュメント化されたことにより、聖像が人びとの信仰対象となると同時に、これらを通じて奇蹟が多くの人に知れ渡るようになったとも考えられる。

［図3］碇を提げたサンタ･ロサ像
（1776年、Francisco Flores作）

［図4］サンタ・ロサの絵画
（18世紀、作者不詳、クスコ画派作）

1－3. 列聖とその背景

サンタ・ロサは1668年に福者に列福されると、その後わずか3年後の1671年に列聖され聖人になっている。彼女と同じ時代を生きた黒人のマルティン･デ・ポラス（Martín de Porras）[7]やフアン・マシアス（Juan Masias）が、20世紀になってようやく聖人に列せられていることと比べても、死後約50年余りで聖人に列せられたサンタ・ロサが特異なことは明らかである。

サンタ・ロサのこの異例とも呼べる早さの列聖について歴史家のハンペ（Martínez Hampe）は、その背後に社会・経済的な集団としての権威を強調しようとする17世紀のリマのクリオーリョの政治的な関心があった点を指摘している［Hampe 1998］。征服後、植民地時代のペルー副王領はインディオとスペイン人という互いに異なる歴史・文化的背景をもつ二つの世界から成っていたが、さらに後者のあいだには、本国生まれのペニンスラールと新大陸生まれのクリオーリョという二つの異なる歴史的背景をもった人びとが存在し、両者のあいだには対立が生まれ始める。そうしたなか、植民地でしだいに力を持ち始めたクリオーリョたちのなかでは、自らをペニンスラールと区別しようとする意識が高まってきていた。そこで、彼らが注目したのがサンタ・ロサであり、クリオーリョたちは新大陸生まれの聖女の列聖のために熱心に資金の援助を行っていった。こうして、新大陸でのアイデンティ

ティを模索していたクリオーリョは、ロサをリマにおけるクリオーリョのシンボルにしていったのであった［Hampe 1998:110］。

17世紀のリマのクリオーリョの影響に加え、同じく歴史家のグラシアーノ（Frank Graziano）の研究からは、ロサの列聖にはドミニコ会や司教、大司教をはじめとするリマのエリート聖職者、スペイン王室の力添えがあった点も認められる［Graziano 2002:9-45］。とくにドミニコ会は、サンタ・ロサが所属していた修道会であったたけでなく、ペルーに最初に足を踏み入れたのもまた彼らであったことからも、熱心にその列聖に関わってきたともいえよう。

こうした研究からするならば、サンタ・ロサはリマのクリオーリョやドミニコ会の努力によって創り出された聖人ではなかろうかと考えられる。したがって、ここではまずサンタ・ロサ形成において、リマのクリオーリョやドミニコ会の政治的な関心と彼らの影響力が指摘できる。しかし列聖後サンタ・ロサは、リマやクリオーリョに限らず、アンデス地域のインディオのあいだにも広まっていくのである。では次にこの点についてみていくことにする。

2. 歴史のなかのサンタ・ロサ

新大陸で最初の聖人として誕生したサンタ・ロサは、1669年にペルーの守護聖人として、続いて1670年にはアメリカ大陸そしてフィリピンの守護聖人にも定められている。本章では、列聖後18世紀から19世紀までに至る歴史のなかに登場するサンタ・ロサの事例をあげながら、ペルーの、そして新大陸アメリカの守護聖人にもなったサンタ・ロサの発展について概観する。

18世紀のペルーは反乱の時代とも呼ばれ、スペイン人支配に対する先住民による反乱が多数生起するが、サンタ・ロサはアンデス各地で発生した反乱のなかで預言とともにたびたび引合いに出される。このサンタ・ロサの預言は、インカ帝国（タワンティンスーユ）が正統な持ち主へと返還される［Szeminski 1993:191, Spalding 1984:273］というもので[8]、当時、インカの子孫を自称し、帝国再建を目指した反乱の指導者が相次いで出現したが、彼らが起こした反乱のなかでサンタ・ロサが取り上げられている。

たとえば、インカ・アタワルパの血を引く正統な子孫であることを自称し、密林地帯を中心に抵抗運動を展開したフアン・サントス・アタワルパ[9]（Juan Santos Atahualpa）は、1743年の戦いの前に行ったミサの聖像行列に、大天使ミカエルとサンタ・ロサの聖像を担ぎ出し、再建された帝国のシンボルとしていた［Castro Arenas 1973:92］。同じくクスコでも、ホセ・グラン・キスペ[10]（José Gran Quispe Tupa Inga）やオルコグアランカ[11]（Juan de Dios Orcoguaranca）が1776年にサンタ・ロサの預言を説いた［Graziano 1999:101-102, Hidalgo 1983:120-121, Szeminski 1993:290-291］ほか、トゥパク・アマルII（José Gabriel Condorcanqui Tupác Amaru）の反乱（1780－1783）でも先住民動員のためにサンタ・ロサの預言を利用していた。反乱のなかでトゥパク・アマルIIは、「サンタ・ロサの預言が我々のもとに実現されるときがやってきた。それが実現されるとき我らに帝国が返還されるだろう」と述べ、この預言を実現するためには、ヨーロッパ人を殺さなければならないとした［Szeminski 1993:291-292］。同様の預言は、これらの反乱に影響を受けたリマ東部のワロチリ郡の先住民蜂起でも聞かれた。インカ帝国の再建を目指したインディオのアントニオ・カボ[12]（Antonio Cabo）は、1750年にワロチリでサンタ・ロサが預言した年だと説き決起し、クスコ出身のフェリペ・ベラスコ[13]（Felipe Velazco Tupác Inca Yupanqui）も、1783年にワロチリでサンタ・ロサの預言の実現を唱えていた［Hidalgo 1983:122, Castro

Arenas 1973:144］。

これらの出来事からはこの時代、戦略的に預言を利用する反乱の指導者の手によって、新たな意味をおびたサンタ・ロサが、海岸部に位置するリマ以外にも、山岳地域や密林地帯にも流布していったことが認められる[14]。そして、彼らが説く預言がきっかけとなりサンタ・ロサの名声は、クリオーリョだけでなく、メスティソやインディオのあいだにも広まっていったことがうかがえる。注目すべきは、インカ帝国再建を目指す反乱運動のなかでサンタ・ロサは、インディオのみならずメスティソも含めた新大陸出身者の「帝国」のシンボルになっている点である。つまり、反乱はインカ帝国再建を目標に掲げてはいたものの、それは単にインディオのみによる「帝国」ではなかったということができる。こうしたスペイン人支配に対する18世紀の一連の反乱では、インディオばかりでなくメスティソやクリオーリョも含めた新大陸出身者が決起し、とりわけ現在のペルーを中心とする地域の人びとの統合を目指していた。要するに、反乱はスペイン人、すなわちトゥパク・アマルIIの言葉にあるように、ヨーロッパ人に対する新大陸出身者によるものだった。そうしたことからも、ペルー生まれであるサンタ・ロサが、彼らを統合していくシンボルのひとつになったといえる。

その後、19世紀初頭の独立の際にもサンタ・ロサは登場する。このときロサはペルーを独立に導いた英雄のひとりとして知られるスクレ（José Antonio Sucre）を守ったとして伝えられる［Mujica Pinilla 1995:193-194］。さらに独立後、ペルーとチリとのあいだに起きた太平洋戦争（1879－1883）の際にもサンタ・ロサは現われ、アンガモスの戦いの英雄となったミゲル・グラウ（Miguel Grau）の船室にその肖像画が飾られていたという［ibid.］。グラウは戦死し、最終的にペルーは敗北するが、奇蹟により現れたロサがリマの防衛に手を貸してくれたとされている［ibid.:194］。

このように、サンタ・ロサはペルーの歴史において重要な起点となる出来事の際に、その記憶が呼び覚まされている。ペルーの守護聖人となったロサは、国家の防衛や英雄を守ったとされているように、この時代、愛国的な聖人としても登場している。

以上、聖人として誕生以降のサンタ・ロサ信仰の歴史的な展開を略述したが、サンタ・ロサは先住民の反乱や国家的な歴史の脈絡に登場するなど、その発展の歴史において統合のシンボルや国家的な表象として政治的に利用されてきたという特徴を持つ。こうした点をふまえながら、次に20世紀のサンタ・ロサ信仰の発展とその背景にある要因について検討していくことにする。

3.　サンタ・ロサと20世紀のペルー

現代のサンタ・ロサ信仰を支えてきた存在として、サンタ・ロサの聖地や国家警察があげられる。本章ではこの二つの問題に焦点をあてながら、サンタ・ロサ信仰の発展について考察していく。

3－1.　よみがえる聖地

サンタ・ロサゆかりの地であるリマには、サンタ・ロサの遺骨が埋葬されているサント・ドミンゴ教会のほかにロサの聖地としてよく知られる場所がある。以下ではまずそれらの聖地の歴史的展開について述べておく。

(1) サンタ・ロサの家

リマのサンタ・ロサの聖地のひとつとして知られるのが、リマ市内中心部にある「サンタ・ロサの家（Casa de la Santa Rosa de Lima）」である。ここは、サンタ・ロサが生前に住んでいた場所であり、敷地内にあるサンタ・ロサの生家や中庭が一般公開されている。中庭にはロサが祈りのために過ごした土塀の庵（ermita）や井戸があり、とりわけこの井戸は「誓願の井戸（pozo de los deseos）」と呼ばれ、今日多くの参拝客を引き付けている［**図5**］。その人気の素となっているのが、この井戸にまつわるサンタ・ロサの奇蹟伝説である。既に述べたように、サンタ・ロサの奇蹟のなかには、苦行の際に起きた井戸の奇蹟譚がある。この奇蹟の舞台となった井戸が現在、「この井戸に手紙を入れると願いが叶う」と信じられており、訪れる人はこの家へとやってきては願いを書いた手紙を井戸に投入する。19メートルの深さのある井戸は既に渇いた状態であるため底には水こそないが、信者が投げ込んだ紙類が数メートルにも積もっている。とくに毎年8月30日前後になると訪れる信者が増し、手紙を手にした人の長蛇の列は周辺の街路にまで延び、警備員による入場制限が行われるほどの人出である。この井戸は

［図5］請願の井戸

［図6］修復中（1920年）の井戸
［Variedades setiembre 1920］

まさにサンタ・ロサを通じた祈願の名所となっており、国内外からの観光客も集めている[15]。敷地内に設けられた売店や周辺に連なる露天商では、ロウソクやロザリオに加えて、サンタ・ロサの聖像やペンダント、カードなどの聖女グッズのほか、サンタ・ロサへの手紙用の便箋も用意されている。

サンタ・ロサの家の井戸や庵がある中庭は、以前はこの家の菜園だった場所で、1920年に整備されると、聖地として再生すべく井戸も修復が行われている［Variedades septiembre 1920］［**図6**］。

(2) サンタ・ロサ大聖堂

「サンタ・ロサの家」とともにリマのサンタ・ロサの聖地を形成するのが「サンタ・ロサ大聖堂（Basílica de Santa Rosa）」であある［**図7**］。今日、大聖堂の名で呼ばれるこの建物は、かつて「サンタ・ロサ教会（Iglesia de Santa Rosa）」と呼ばれていたもので、サンタ・ロサに捧げられた最初の教会として17世紀に建設されている。サンタ・ロサ教会は、聖女生誕400周年を記念して着工された修復および拡張工事が1992年に完了すると、翌1993年にローマ教皇ヨハネ・パウロ２世（Juan Pablo II）によって、「大聖堂」としての称号が与えられ、以来「サンタ・ロサ大聖堂」と改名された［Basílica Santuario de Santa Rosa］。

修復後、ロサ（薔薇）の名をもつ聖女にちなんで、赤い薔薇をイメージした赤色に外壁が塗装された大聖堂は、他の建物と比べてもひときわ目だった外観を呈している。内部の中央祭壇には、聖像の周りを囲むようにサンタ・ロサの生前のエピソードを描いた9枚の絵画が飾ってある。この大聖堂は、現在サンタ・ロサ信仰の活動の中心となっており、日々のミサに加え、毎月30日には信徒会（hermandad）が集まり、夕方にはミサと輿に乗せられたサンタ・ロサの聖像行列（procesión）が行われる。8月のサンタ・ロサの日には、ここで9日間の祈り（novena）がささげられる。これらリマのサンタ・ロサの聖地を成す一連の施設は、現在ドミニコ会に所属するスペイン人修道士が管理しており、1948年には聖地が国の歴史遺産にも指定されている［Basílica Santuario de Santa Rosa］。

この大聖堂に関して特筆すべきは、上述のサンタ・ロサ教会が大聖堂として定められる以前に、この建物、つまり現在の大聖堂（かつてのサンタ・ロサ教会）の隣に新しく「サンタ・ロサ大聖堂」（以下「新大聖堂」と記す）が建設される計画があり、その建設に向けてリマの聖地を整備しようとする動きがあったという事実である［**図8**］。資料によれば、サンタ・ロサの300回忌を終えた翌年の1918年、大司教の認可を得て建設事業の計画が発表されている。建設計画の第一歩としてリマの大司教は同年8月に寄進の予約申し込みを開始し、1924年から6年間にわたって新大聖堂建立のための寄進の実施を聖職者や信者に向けて言い渡している［El Amigo del Clero agosto 1918］。その後、建設を推進する委員会（Comite Pro Basílica）が発足され、1944年にようやく最初の礎石が置かれたものの［Cultura Peruana 1944, El Comercio 1944］、資金不足などにより、結局この建物は完成をみるには至らなかった[16]。

［図7］サンタ・ロサ大聖堂

［図8］1920年当時のサンタ・ロサ教会と新大聖堂建設予定地
［Variedades setiembre 1920］

(3) 巡礼地キベスのサンタ・ロサ

サンタ・ロサの家や大聖堂が位置するリマ市内中心部から離れた場所に、もうひとつの聖地「キベスのサンタ・ロサ（Santa Rosa de Quives）」がある。サンタ・ロサの巡礼地として有名なキベスは、リマ北東部のカンタ郡に位置する山間の村で、リマ市内から車で1時間半ほどの距離にある。キベスが位置するカンタ郡は、植民地時代には鉱山で栄えた所で、聖地のあるキベス自体は人口600人程度（1986年の時点）の小さな村である［Millones 1991a:124］。そこにサンタ・ロサが幼少の頃に一時期過ごした家があり、この家の礼拝堂と彼女が堅信の秘蹟を受けた教会が名所となっており、祝祭の行われる8月に限らず、一年をつうじて巡礼者が訪れる［**図9、図10**］。

この小さな村が現在のように巡礼地として生まれ変わるのは、サンタ・ロサの旧家にある礼拝堂の修復・再建が始まった1924年以降のことである。それまで廃墟と化していたサンタ・ロサの旧家の礼拝堂は、1924年にリマ大司教の手によって修復工事が開始される。これに合わせて、同じ年の8月31日には、修復中の礼拝堂で記念すべき最初のミサが執行され、この計画の推進者である大司教率いるリマからの初の巡礼も行われる［El Amigo del Clero agosto 1924, El Comercio 1924, Variedades 1924］。それから2年後には礼拝堂の修復も完了し、キベスが聖地として整備されると、1926年に守護聖人としてサンタ・ロサへの最初の祝祭が開催されたのだった［El Comercio 1926］。こうして、ロサの死後3世紀以上の時を経て、キベスのサンタ・ロサの旧家は、聖地へと変貌を遂げていくのである。

以上からは、現在サンタ・ロサの聖地として知られ、多くの信者を集めている場所が20世紀になり、1920年代を中心にカトリック教会の手により整備され、聖所としての再生の転機を迎えていることがわかる。では、なぜこの時代に一連の聖地整備事業が行われたのだろうか。次にこれらの聖地事業を当時のカトリック教会の状況との関連から検討し、この事業の担い手である教会がこの時代になりサンタ・ロサに関心を集めるに至った背景について考察する。

［図9］キベスのサンタ・ロサの家

［図10］キベスの教会

3ー2. 聖地の活性化とカトリック教会

19世紀半ばになるとペルーでは、教会権力の政治への介入に反対する自由主義勢力の動きが活発になり、教会や聖職者が保持していた特権が徐々に廃止される。また、自由主義や実証主義に影響を受けた中・上流階級の人びとから教会と国家の分離を求める動きも高まっていく。さらに地方では、深刻な聖職者不足や都市への人口移動、10分の1税の廃止もあり、教会がそれまで住民に対して持っていた統制力は弱まるばかりだった［Klaiber 2002:87-88］。

教会史研究で著名なイエズス会士クレイバー［Jeffrey Klaiber 1992］が、1855年から1930年までのカトリック教会を“militant”という言葉で特徴づけているように、19世紀半ばから20世紀初頭に至る時代のカトリック教会は新たな状況に直面し、その打開のために戦闘の時代となる。とくにこの時代の教会が闘わなければならなかったのは、自由主義や実証主義に加えて、19世紀末以降勢力を拡大しはじめたプロテスタントの問題である。

この闘いのなかで教会は、自らの利権を守るために、ローマ教皇庁との結びつきを強め、時には国

家の政治的な権力にも頼るようになる一方、社会に対しては、学校創設や地方の司祭不足を補うために、外国からの修道会や聖職者を積極的に受け入れ、これらを通じて社会における教会の存在感と統制力の回復を目指した。しかしこのときのカトリック教会は、社会変化に直面していながらも、依然として保守主義の姿勢を崩さず、社会の変化に対しても常に教会の立場を守ろうとした［ibid.:22-23］。教会の生き残りがかかるこの時代のなかで、聖職者と平信徒たちの基本戦略は、力を合わせ団結すること、そして教会を守り、社会における教会のポジションを守るために闘うことだった［ibid.:100］。

こうしたカトリック教会にとっての闘いの時代の最中に実施されたのが、一連のサンタ・ロサの聖地活性化である。その最初の取り組みとして提案されたのが、新大聖堂の建設になる。新大聖堂建設にあたり当時のリマ大司教が、聖職者をはじめ信者に宛てて出した司教案内（Invitación pastoral）には、建設に向けた当時の教会の思いやサンタ・ロサに対する視点が表れている。それは次のような文章で始まる。

「信者のみなさん：
神秘的なロサ（薔薇）を我々に贈ってくださった神の比類なき栄誉に対して、その神への心からの感謝の念を、我らの貴き祖国にふさわしいかたちで、永遠に残すために我々が一致団結して力を合わせるときがついにやってきたように思います。このリマの街に神が芽生えさせたロサ（薔薇）は、3世紀にもわたりアメリカや世界をその香りで満たしてくれました。」［El Amigo del Clero agosto 1918:366］

この文章にみるように、冒頭では新大聖堂の建設のための団結が呼びかけられる。これに続く文章では、聖人伝にも記されているロサが行った罪の贖いのための苦行や犠牲について触れられ、そうしたロサの行為が、カトリック的な「栄光（グロリア）」として賞賛される。と同時に、そのなかでロサを「英雄（ヒロイン）」であるとし、「数ある英雄たちのなかでも至上かつ最も秀でた英雄」であり、「国民的英雄」としても称えている点は注目に値する。さらに続いて、「祖国が受けた数えきれないほどのすばらしい恩恵に対し、神への感謝のしるしとして聖地を建設し、聖女ロサという我らの英雄の記憶を永遠に残すまさにそのときなのである」と述べ、全信者に向けて寄進が勧められる。このあと寄進の手順が示されると、最後に聖職者や信者に対して次のように呼びかけている。

「サンタ・ロサの同郷人の誰ひとりとて、この事業に貢献なき者がないように。知識人も無知な人も、金持ちや物乞いも、老いも若きも、子供までもみなが、神への国民の謝意の表明となるこの記念碑的建物（モニュメント）の建設のために、犠牲と献身をささげることができるのです。このモニュメントは、リマの栄光である神秘的なロサに対する純粋で聖なる愛の表明でもあり、彼女はリマの喜び、ペルーの喜びでもあり、そして我が国民の誉れ、我らの仲裁者でもあります」［El Amigo del Clero agosto 1918:369-370］

この司教案内は5ページにもおよび、加えて18項目にわたる詳細な寄進の手引きも付されている。それは新大聖堂の建設がこのときの教会にとっての一大企画であったことを示唆しているようにもとれる。そして、案内につづられた言葉からは、新大聖堂の寄進を通じて、信者のあいだにサンタ・ロサの記憶を呼び覚ますとともに、この建設により教会と信者の団結を図り、国民の一体化を目指そうと

する教会側の思いが読み取れる。つまり、サンタ・ロサ新大聖堂の建立は、弱体化しつつあるカトリック教会にとって、教会の存在感を取り戻し、社会や信者との紐帯を強めることを目的とした一大事業であったと考えられる。

さらに、ここで新大聖堂の建設事業を「祖国にふさわしいかたち」で表す神への「国民の謝意」として、祖国のための国民的行事として位置づけている点は興味深く、そこには、この時代の社会状況がいくぶん影を落としているように感じられる。この点に関しては、さらに議論の余地があるが、ペルーでは19世紀末から20世紀初頭にかけて国をあげて近代国家形成への情熱がみられ、ペルー・アイデンティティの模索と国内統合への自覚がみられた［国本1977:90-91］。そうしたなか、ペルー独自のアイデンティティと国内統合のためのイデオロギーが必要とされたことからも、そのイデオロギー装置のひとつとしてペルー生まれで、「国民的英雄」として称えられるサンタ・ロサが利用されたとしてもそれは想像に難くないだろう。

さて、こうした時代背景に加えて、20世紀にはじまる一連の聖地活性化事業を理解するための鍵を握るのは、当時リマの大司教を務めていたエミリオ・リソン（Emilio Lissón）の存在である。1872年にペルー南部のアレキパ県に生まれたリソンは、ビセンティノ修道会（Orden de San Vicente de Paúl）の司祭として1895年にフランスのパリで叙階されると、1909年からペルー北東部のチャチャポヤス県で司教を務め、1918年2月にはリマに移り、それからまもなくして同年6月にはリマの大司教に任命されている［Vargas Ugarte 1986:250-251］。リマ大司教在任期間中（1918－1931年）にリソンは、神学校や私立学校の設立と運営に数多く貢献する一方で、1926年の教区教会会議（Sínodo diosesano）に続いて1927年には教区管区長会議（Concilio provincial）を開くなど、首都リマの大司教として熱意に満ちた活動を展開し、彼の敬虔な行為を知る周囲の誰からも模範的な人物であると評されていた［Klaiber1992:100-101］。

この大司教リソンこそが、リマのサンタ・ロサの聖地やキベスにあるサンタ・ロサの聖所の再建を推進した人物であり、先述した新大聖堂建設の寄進やキベスの聖所再建の文書もリマ大司教エミリオ・リソンの名で提出されている。彼はまた、1930年8月にサンタ・ロサの祭礼に関する教令（decreto）を発布している。

教令の冒頭でリソンは、「我が教区信者にサンタ・ロサへの信仰を回復する必要がある」と述べ、その実現のために、すべての教会がサンタ・ロサの日を祝い、夕べの祈り、荘厳ミサ、8日間のミサを行うことを定め、8日間のミサの期間中にはリマにある教会教区がそれぞれにサンタ・ロサの聖地への巡礼を組織するよう促している［El Amigo del Clero 1930: 535-536］。

このように、リソン大司教はサンタ・ロサ信仰の基盤整備事業を計画・実施しただけでなく、その信仰を再生すべく祭礼ならびに巡礼をも推奨しており、この点からも彼はサンタ・ロサ信仰活性化の真の立役者だったといえる。

サンタ・ロサに対するリソンの関心は、リマ大司教就任当初からみられる。1918年7月、リマ大司教就任の際にリソンが出した「司教教書（Carta Pastoral）」のなかで彼は、サンタ・ロサについて次のように言及している。

「我々はペルー人であり、聖女であるサンタ・ロサを賛美するのである。このペルー人の聖なる処女はキリストの教会と祖国への情愛の統合のシンボルである。」［Carta Pastoral 1918:7-8］

注目すべきは、これに先立つ部分の文章で、以下のように述べている点である。

「キリストを信奉する人たちにとって統一こそが最大の理想である。キリストを信じる者たちのあいだの結束は崩されている。我らの最大の願望は、まだいくぶん信心のある人たちを一体化させることにちがいない。・・・《中略》この結束のために第一に我々が皆、ペルー人家族（la familia peruana）を形成する一員にならなくてはならない。我々のあいだの利害関心は多種多様ではあるが、幸いにして神のご加護による二つの絆がある。それはキリストの教会への愛と祖国への愛である。」［Carta Pastoral 1918:7］

リマの大司教としての初心を表明したこの文書からは、リソンがペルー人の一体化を目指していた点がうかがえる。そのために、彼の言う「ペルー人であり、聖女である」サンタ・ロサがペルー人の統合、さらにいえばキリスト教徒の統合のシンボルとして用いられたのだった。こうしてみると、リソンが行った一連のサンタ・ロサ信仰活性化事業の背後にも、キリスト教徒やペルー人の統合という意図が存在していたと考えられる。

またここでリソンが、サンタ・ロサを教会と祖国との統合を象徴するものとしてもとらえている点は興味深く、そこには彼の国家に対する姿勢が見え隠れしている。後述するように、リソン大司教は教会と国家権力との結びつきを強めようとした人物であったとしてもよく知られる。彼と国家権力との関係についてはのちの節で詳しく述べていくため、ここでは一連の聖地活性化事業がこのときの大司教リソンによって推進された計画だったという点を記すにとどめ、次節ではサンタ・ロサが国家に取り込まれていく過程をみていくことにする。

3－3. 国家に取り込まれる聖女

今日、国家警察の守護聖人となったサンタ・ロサは、警察署や駐在所などあらゆる警察機関に彼女の聖像が置かれており、「国家警察の守護聖人」という衣をまとったサンタ・ロサはペルー各地に広まっている。とくに毎年8月30日になると、サンタ・ロサを祝う大規模なセレモニーがリマだけでなく、全国各地にある警察機関でも行われ、サンタ・ロサの聖像を担いだ警察官の行列が広場や町を練り歩く姿はペルーでは馴染みの光景である。全国的規模で活動を展開する国家警察とサンタ・ロサが関係づけられたことが、教会と同様にサンタ・ロサ信仰の発展に一役をかっているのもまた確かであろう。

ここでまずその歴史を振り返ってみると、サンタ・ロサが警察の守護聖人としてカトリック教会から正式に認められたのは、1965年と比較的最近になってからである。当時のローマ教皇パウロ6世（Papa Pablo VI）により1965年4月29日に、サンタ・ロサは現在のペルー国家警察の前身であるペルー治安警察（Guardia Civil del Perú）の守護聖人として定められている［Revista de la Guardia Civil del Perú 1965］。

しかしながら、実際にサンタ・ロサが警察とともに登場するようになるのは、それよりも40年近くも前の1928年にさかのぼる。1922年、当時のレギア政権[17]（1919-1930）によりペルー警察は抜本的な改革が行われた。この改革実施にあたりレギアはスペイン政府と協定を結び、それに基づいて1922年から1928年に派遣されたスペイン警察の一隊の指揮下ペルー警察は再編成されると、これにともない警察学校も設立された［Basadre 1983:414-415］。スペインの様式に倣い、近代的な警察として新しく生まれ変わったペルー警察は、1928年5月21日に8月30日を「警察の日（Día de la Policía）」として定めると同時に、

このときサンタ・ロサを守護聖人として迎え入れたのだった［Revista Policial del Perú 1950, Basadre 1983:414-415, Guerra 1984:59-60］。以来、警察機関では警察の日を記念した8月30日の祝賀イベントは毎年恒例の行事となった。リマではカテドラル（大聖堂）でのミサのあと、大統領や聴衆を前に殉職者を称える儀式や各部隊の実技も実演され、この日は警察の名声と栄誉をたたえ、国民に対して誇りと威厳をアピールする機会でもあった［Revista Policial del Perú 1933］。

国家警察とサンタ・ロサの関連について、1965年にペルー警察が発行する機関誌（Revista de la Gualdia Civil del Perú）に「警察とサンタ・ロサ」というタイトルで書かれた記事では、「天上からのプロテクトーラ（守護者）たるサンタ・ロサ」と「ペルーの地上におけるプロテクトール（防衛者）である警察」［Revista de la Gualdia Civil del Perú 1965］と述べ、両者を「プロテクトール」という点で結び付けている。

また、「警察の日」という見出しで1940年に掲載された記事では、サンタ・ロサを守護聖人として崇拝するようになった経緯を次のように述べる。

「栄誉ある伝説を呼び覚ますとともに、神の祝福を受けた女性、誇り高きペルーの守護聖人サンタ・ロサの庇護のもと、我々はこの日を盛大に祝う。彼女はまさに国民性を象徴する女性であるばかりか、アメリカ大陸のキリスト教徒と人種がもつ美徳を集約した女性でもある。彼女を守護者とするペルーの警察機関にとり、ロサの英雄的行為と穢れのなき愛国心は、最良の励みとなる。もし仮に、独立の戦いのさなかに、我らの国民的英雄が、国軍の守護聖人であるメルセデスの聖母により庇護されたというのなら、我々の前に立ちはだかる困難な課題においても、我々はリマのロサのもと庇護されるだろう。そして、我々は彼女とともに国家の栄光を分かちあうのだ。彼女は国家をこのうえなく愛し、植民地時代には祈りにより国家を脅かす海賊船をも追い払った。我々がペルーの英雄（ヒロイン）である偉大なリマの聖女を崇拝するにあたり最初に考えついたことはこういうことである。」［Revista Policial del Perú septiembre 1940］

ここでのロサは単に守護聖人としてだけでなく、「ペルーの英雄」として、国民性や愛国心を象徴する存在であるととらえられている。そしてサンタ・ロサが守護者として警察を守るという点に加え、彼女が海賊から国家を守ったという偉業、それが警察と結びつけられている。このように、伝説のなかでリマやペルーを守ったと伝えられるサンタ・ロサの名声が、20世紀になって再び読み込まれ、国家警察に取り入れられていったことがわかる。また、ここではペルー国軍とメルセデスの聖母について言及しているように、守護聖人の導入はペルー国軍の守護聖人を意識したものだった。

では次に、この時代にサンタ・ロサが登場してきた背景について、サンタ・ロサと警察を最初に結び付けたレギア政権に注目し考えてみたい。というのも彼はまた、国家事業としてサンタ・ロサ新大聖堂の建設にも関わっているからである。

レギアは、1925年8月に「サンタ・ロサ国立大聖堂（Basílica Nacional de Santa Rosa de Lima）」というタイトルの大統領の公式文書を発表し、その前文で次のように述べている。

「アメリカ大陸の真の栄光であり、ペルー女性の最も高尚な象徴であるサンタ・ロサの記憶を永遠に残していくことは国家の務めである」［El Amigo del Clero enero 1926:6］

続く文書のなかでレギアは、新大聖堂建設の中核となる委員会の発足を命じ、この委員会が建築家を紹介するとともに、新大聖堂の配置や施工など建設事業にかかるすべての計画を実施することが言い渡されている。委員会には大司教だけでなく、大統領、市長、公共社会福祉部門の長官も含まれており、ここからは新大聖堂の建設が国家事業のひとつとして、教会と国家の協同で行われたことがみてとれる。

この文書に記されているように、レギアはサンタ・ロサをペルー女性を代表する人物として位置づけ、新大聖堂建設を国家の責務とみなすと、それを国家事業に結び付けている。レギアのこうした考えは、サンタ・ロサ新大聖堂を「国立大聖堂」と前文に明記した点にもうかがえる。

この事業に関連して興味深いのは、レギアはこの時代、近代国家建設のために輸送・通信手段、道路・港湾設備の充実をはかり、都市の改造に着手するが［辻2000:320］、レギアが推し進めた都市改造では、道路などのインフラ整備にとどまらず、都市景観を整えるべく、建物の整備にも着手している点である。その過程で彼は、大統領官邸の修復、銀行や博物館の開設など国民国家を建設していくうえで重要な建物の整備を手がけただけでなく、広場や公園にはペルー独立の英雄サン・マルティンやスクレをはじめとする歴史的な人物のモニュメントを製作した。これらのモニュメントは、ペルー的なものを象徴するシンボルであっただけでなく、レギアが目指した新生国家（Patria Nueva）の理念の現れともいえるものだったという［Guerra 1984:68-69］。

またこの時期、1921年にペルーは独立100周年を迎え、諸外国からの使節団も出席して盛大な記念行事が行われている。これらの建設事業は、ペルー独立100周年記念に向けて行われたものでもあり[18]、それは体外的にペルーをアピールするものであったと考えられる[19]。そうであるなら、こうした社会状況のもと、国威発揚と国家の独立を記念する気運の高まりのなかで、新大聖堂の建設も始動していったともいえる。しかし、サンタ・ロサ新大聖堂の建設はこの時代に始められた計画ではあったものの、独立記念祭までに完成には至らなかった。1920年8月のVariedades誌は、サンタ・ロサ新大聖堂の建設の停滞を指摘し、「独立100周年記念祭に我らの聖女の教会堂が建立していないのは恥ずかしいことだ」と述べている［Variedades agosto 1920］。

こうしてみていくと、レギア政権の一連の政策のもと、ペルー生まれで、まさに彼が「ペルー女性の象徴」と称えるサンタ・ロサが、ペルー的なものを象徴するシンボルとして、レギアが目指す新生国家建設のためのイデオロギー装置のひとつとして取り込まれていったとも考えられるのである。

前節で示した1918年から1920年代にかけて教会が主導して始められたサンタ・ロサ信仰基盤の整備や活性化事業とほぼ時を同じくして、国家警察がサンタ・ロサを守護聖人と定めたことが、単なる偶然ではないことは、これらの事業へのレギア大統領の関わりからもうかがえる。この点はまた、当時の教会と国家の関係からもうかがい知ることができる。そこで次に、この時代の教会と国家の関係に着目し、1920年代にサンタ・ロサが再び注目を集め始めた背景について考察することにする。

3－4. 教会と国家

ラテンアメリカ諸国においては、19世紀初頭に独立が達成されてからしばらくのあいだ教会と国家は一体であるという考え方が強かったが、1850年代に入ると政教分離をうったえる自由主義派の運動の影響により教会と国家の結びつきが徐々に崩れ始める［アンドラーデ 1994:112］。ペルーでも1855年以降は、自由主義派が力を伸ばしてきたこともあり、教会と国家はしだいに距離を置く方向へと進んでいく。しかしこの流れに逆らうかのように、レギア政権時代になると、教会と国家との関係は再び密

接になる。

レギアの政治手法は労働者や学生を強権で押さえ込むなど独裁的である一方で、教会に対しては排除するのではなく、むしろ結びつきを強め、調和をはかろうとした［Klaiber 1992:100］。その姿勢は、教会の公式行事に積極的に出席する彼の行動にも表れており、当然のことながら大統領はサンタ･ロサの祭典儀式にも姿を現す。

1920年9月のVariedades誌が、「毎年サンタ・ロサを記念して行われる宗教儀式は、今回我々にとって特別な意味を持った。それは記念行事の荘厳さというよりもむしろさまざまな状況、とくにアグスト・レギア氏と数名の国家代表が出席したことであるといえる」［Variedades setiembre 1920］とつづっているように、大統領就任の翌年、レギアがサンタ・ロサの宗教行事に出席したことを異例の事態として伝えている。

これに対して、このときリマ大司教を務めていた先述のリソン大司教もまた、大統領の意思に応える動きをみせている。リソンは当時の他の聖職者と同様、教会を強くするためには国家の保護を獲得する必要があると考えていたこともあり、彼は教会行事には大統領を必ず招待し、教会の「パトロン」としての大統領の役割を強調しようとした［Klaiber 1992:100］。クレイバーがたびたび強調しているように、レギアとリソンの時代は、国家と教会の密接な関係が最も際立った時代だった［Klaiber 1977:97-101, 1992:22-23］。**［図11］**

レギアとリソンのこうした姿勢に表われた国家と教会との間の近接関係は、彼らが政治と宗教の主役の座についている時代に行われた儀式にも端的に示されている。

1923年5月に大統領再選を前にしたレギアは教会の支持を得ようとして、ペルーを「イエスの御心（Sagrado Corazón）」に捧げるという宗教儀式を計画した［Klaiber 1977:128-131］。教会と国家の統合を象徴するこのセレモニーはあえなく失敗に終わるが、このとき儀式を執行する予定だったのがリマ大司教リソンであった。この時代錯誤の政教一致政策に対して、急進派の旗手アヤ・デ・ラ・トーレ率いる「ゴンサレス・プラダ人民大学」[20]に結集する労働者と学生は、儀式の行われる5月23日に反対デモを行い、死傷者を出す惨事となった［辻1993:100］。

これを機に、教会と国家の親密な関係を非難する世間の声はますます高まっていった。自由主義派の労働者や学生をはじめとする反教会権力グループに限らず、この出来事に反発する一般市民からも聖職者に対する抗議文が寄せられ、その後抗議行動が相次いで起こった［Klaiber 1977:131-133］。この矢面に立たされていたのがリソンであり、最終的に彼は、オンセニオ（Oncenio）と呼ばれた11年におよぶレギア独裁政権の終焉とともに、リマ大司教の座を退くことになる。1930年8月、軍部を背景とし

［図11］
レギア大統領（中央）と
リソン大司教（右）
［Durand Flores 1933］

たクーデターによりレギア政権が倒されると、政権を奪った次期大統領サンチェス・セロ（Luis Miguel Sánchez Cerro）は、リソンに対しても大司教の解任を迫り、リソンは1930年12月にローマへと渡ると、それからまもなくして辞意を表明した［Klaiber 1992:101］。その後スペインのセビージャへ身を移したリソンは、以来二度とペルーへ戻ることはなく、1961年にバレンシアで生涯を閉じるまでスペインで過ごした［Vargas Ugarte 1986:250-251］。このように大司教の地位を追われたリソンは、彼のリマ大司教としての就任期間がレギアの11年間の大統領時代と重なっており、皮肉にも2人は退任までその歩みをともにしてきたのだった。

こうしてみると、1920年代からのサンタ・ロサをめぐる動きの背後には、その立役者となる2人の人物の親密な関係とそれに裏打ちされる教会と国家の密接な関係があったという点が指摘できる。そして2人がそろって「サンタ・ロサの記憶を永遠に残す」ためとして、新大聖堂建設に関わっていった点もまたこの2人の関係を象徴するものといえよう。このように、この時代のサンタ・ロサ信仰の再生と発展の影には、こうした国家と教会との分かちがたい関係があったといえるのである。

おわりに

以上、本稿ではサンタ・ロサ信仰の発展について、とくに20世紀を中心に分析をすすめてきた。これにより明らかになったのは、今日我々が目にするサンタ・ロサの聖地や巡礼地では、1920年代を中心に修復や建設に向けた新たな展開がみられ、それとほぼ時を同じくして国家警察の側でもサンタ・ロサを守護聖人に迎え入れているという点である。この時代に同時多発的に起こったサンタ・ロサ再興の動きの背後には、生き残りをかけた教会による信者の統合や国民統合を目指すレギア政権の国家政策にみられるように、聖女をめぐる教会や国家の個々の戦略があったと同時に、教会と国家との緊密な協調関係も存在していたのだった。

さらに、サンタ・ロサ再興の影には、国民統合とペルー・アイデンティティの模索という当時の社会状況も指摘できる。ペルーではチリとの太平洋戦争の敗北がきっかけとなり、19世紀末から20世紀初頭にかけて、国民国家形成と国民統合を目指した近代化政策がとられる。この動きは政治の場にとどまらず、文芸や評論などを通じて文化面にも及んだ。こうした国をあげての国民国家形成とナショナリズムの勃興が、国民的あるいは国家（ペルー）的なサンタ・ロサを再び呼び覚まさせたとも考えられるのである。警察や教会の声明のなかでサンタ・ロサを「国民的英雄」「国民性を象徴する女性」、「ペルー女性の象徴」と称揚する言葉からは、サンタ・ロサが国家や国民を象徴するシンボルとして強調されている点が読み取れるように、この時代、サンタ・ロサは国民統合の文化装置のひとつとして教会や国家の関心を再び集めるに至ったのだった。

本稿では十分に論じることができなかったが、20世紀のレギア政権は先住民の国民国家への統合を積極的に進める政策をとっている［上谷 1998、辻 1983］。こうした当時のレギア政権の政策や国民国家形成という時代背景とサンタ・ロサとの関わりについてはさらに詳しく検証していく必要があり、これについては今後の課題としたい。また本論では、サンタ・ロサ信仰の発展を教会と国家の動きを中心に述べてきたが、こうしたマクロな動きだけでなく、村落や大衆レベルに目を向け、個別の事例に即しながらサンタ・ロサ信仰をとらえていくことも、今日の信仰発展の理解につながるといえよう。現在ペルー全体を見渡しても、サンタ・ロサ信仰は各地に拡大しており、直接的であれ間接的であれ、本稿で述べてきたような聖地や国家警察を通じた教会や国家の影響を受けながら発展しているとも考えられる[21]。

謝辞：

本論文で用いた資料は、2005年から2008年のあいだに4度にわたりペルーで行った現地調査の際に収集したものである。これらの調査は、高梨学術奨励基金、財団法人笹川科学協会研究助成、総合研究大学院大学海外学生派遣事業Aにより可能となった。この場を借りてお礼を申しあげます。また、資料収集に際してご指導・ご協力いただいた、国立サン・マルコス大学のルイス・ミリョーネス教授とペルー国家警察歴史博物館のガブリエル・カルデロン氏のお力添えにも感謝の意を表したい。

[1] 国勢調査をもとにした筆者の調べによれば、サンタ・ロサという名のつく村は、1940年には176であったが、1993年の時点では530ある。聖人の名前をとってはいないが、それ以外にも、サンタ・ロサを守護聖人として崇拝する村はあることからも、それらを含めると相当数にのぼることが予想される。

[2] たとえば、ミリョーネス（Millones 1988）はペルー中央高地フニン県の一村落で行われるサンタ・ロサ祭礼について記述している。歴史研究以外の分野ではこのほかにフローレス（Flores 1995）によるサンタ・ロサの絵画や彫刻に関する研究がある。

[3] El Amigo del Clero は1891年から1968年まで発行された。

[4] この機関誌は、1931年の初版以来1965年まではReviasta Policial del Perú のタイトルで出版され、以後1988年までは、Revista de la Guardia Civil del Perú、1989年からはRevista de la Policía Nacional del Perúに変わっている。これはペルー警察の再編により、名前が変更されたためである。

[5] ラテン語で出版されたハンセンの聖人伝は、イタリア語、ポーランド語、フラマン語、ドイツ語、フランス語に翻訳されている［Millones 1989:892］。

[6] 碇を手にした聖像はこのほかにも、サンタ・ロサ修道院（リマ）やナザレ教会（リマ）の祭壇などでみられる。フローレス［Flores Aroz 1995］によれば、サンタ・ロサの家にある２つの聖像とサンタ・ロサ修道院（Monasterio de Santa Rosa de Santa María）に置かれた聖像は、17世紀と18世紀に造られたことがわかっている。また、リマの人類学考古学博物館に収蔵されている絵画のうち、碇を手にしたサンタ・ロサの肖像画は18世紀に描かれたものであるほか、リマのロルカの家（Casa Lorca）にも18世紀に描かれたクスコ画派作の碇を持つサンタ・ロサの絵画がある［Flores Aroz 1995］。

[7] マルティン・デ・ポラス（1579－1639）は、1962年5月にJuan XXIIIにより列聖されている。クリオーリョのサンタ・ロサに対して黒人のマルティン・デ・ポラスは非常に対照的な特徴をもつが、彼もまたペルー生まれかつドミニコ会出身の聖人であり、サンタ・ロサとともにペルーではよく知られている。またドミニコ会では、1975年に列聖されたフアン・マシアス（1585－1645）を加えて、ペルーを、そしてドミニコ会を代表する3聖人として讃えられている。サント・ドミンゴ教会には、この3人の聖人に捧げられた祭壇があるほか、教会のステンドグラス、入り口に飾られた絵画にも3人が並んで描かれている。

[8] ムヒカ・ピニジャによれば、この預言の起源はサンタ・ロサについて書いたWilliam Bennet Stevenson の”A Historical and Descriptive Narrative of Twenty Years Residence in South America”のなかにあり、彼の著作は1662年に出版されていることからも、17世紀には預言が流布していたという［Mujica Pinilla 1995:188］。しかし、そうであったとしても、サンタ・ロサの預言の実現を説いた18世紀の反乱の指導者が、実際にこれを直接的にはどこから持ち出してきたのかは不明である。

[9] フアン・サントス・アタワルパは、カハマルカもしくはアマゾンの出身であったらしいが、インカ・アタワルパの血を引く正統な子孫であると自称すると、自分が統治してしかるべきインカ帝国を取り戻すことを目的に運動を展開した［バルカルセル1985:12-13］。彼は密林地帯を中心にスペイン人支配に対する抵抗運動を組織した。

[10] ホセ･グラン・キスペは、数字の７が並ぶ年にインカ王国は即位することになるという、当時民衆のあいだに流布していた迷信を利用し、1777年こそ待ちに待ったインカ帝国の即位の時であると説いた。彼はインカ帝国と変わらない帝国を建設することを目指し、その国王として自らが君臨することを望んでいた［バルカルセル1985:18-19］。

[11] インディオのオルコグアランカは、帝国が正統な持ち主に返還されるというサンタ・ロサの預言を主張した。彼が目指した新しい世界の宗教はカトリックであるが、それを統治するのはインカであるとした［Szeminski 1993:291-292］。

[12] インディオのアントニオ・カボは、サンタ・ロサが1750年に帝国が正統な持ち主に戻ることを約束したとする［Castro Arenas 1973:144］。彼もまた、インカ帝国再建を目指す運動で活動しており、彼が支援した一群のなかには、フランシスコ・インカ（Francisco Inga）という人物がおり、彼はインカの出自を主張していた［バルカルセル1985:16］。

[13] クスコ出身のフェリペ・ベラスコは、トゥパク・アマルIIの親戚にあたる人物であり、1783年にサンタ・ロサの預言の実現をうたってインディオとともに蜂起しようとした［Hidalgo 1983］。

[14] この点に関して興味深いのは、クスコのワロ（Huaro）やオロペサ（Oropesa）の教会には、18世紀にサンタ・ロサの壁画が描かれていることである［Mujica Pinilla 1995:189］。これの教会はいずれもキスピカンチス郡に属し、サンタ・ロサの預言を唱えたトゥパク・アマルらが活動していた地域である。

[15] サンタ・ロサの家にある建造物には、スペイン語だけでなくラテンアメリカ以外の外国人向けに英語でも説明書が付けられている。

[16] 教会による寄付金集めや基金の設立など、新大聖堂建設に向けた努力は1950年代まで続けられていた記録が残っている［El Amigo del Clero agosto 1950］。

[17] 1919－1930年はレギア政権の第二期にあたる。レギアは1908－1912年にも大統領を務めた。この第一期に対して、第二期の11年間はオンセニオと呼ばれ独裁政権として知られている。

[18] 独立100周年を記念しレギアは、国家の宗教に敬意を表して現在の大司教館も建設している［Ponte 1965:283］。

[19] サン・マルティンの像の除幕式は、独立100周年記念行事の際に各国の代表団が臨席するなか盛大に行われた。この時の模様に関しては、Benjamin Valverde による“Album Gráfico del Centrenario” に掲載されている。

[20] 先住民の国内統合を説いたペルーの思想家ゴンサレス・プラダの名をとって設置された大学。この大学は労働者に開放された大学として、「労働者が社会問題を学び、先住民の権利擁護を知る」ことを目的とした［辻 1993:99］。

[21] たとえば、筆者が調査を行っているペルー南部アプリマック県のある地域では、サンタ・ロサ崇拝が警察との関わりから導入されている。この地域は、1980年代後半から1990年代初頭にかけて、テロリズムの影響が強かった地域である。筆者の聞き取り調査によれば、軍部や警官との衝突が激しかった当時、この地域の住民がサンタ・ロサ崇拝を始めたという。この地域にかかる大橋には、サンタ・ロサという名前がつけられており、それはテロリスタの来襲を防いでほしいとの願いからだという。

参考資料

El Amigo del Clero -Boletín Eclesiástico del Lima-
N°897, 15 de Abril, 1917.
N°900, 1 de Junio, 1917.
N°904, 1 de Agosto, 1917.
N°929, 15 de Agosto, 1918.
N°1063, 15 de Agosto, 1924.
N°1060, 1 de Junio, 1924.
N°1085, 1 de Enero, 1926.
N°1091, 1 de Abril, 1926.
N°103, 2ª época, Tomo III, Setiembre 1929.
N°155, 2ª época, Tomo IV, 1930.
N°205, 2ª época, Agosto, 1933.
N°1350, Junio, 1936.
N°1351-52, Julio-Agosto, 1936.
N°1363-64, Julio-Agosto, 1937.
N°1388, Agosto, 1939.

Reviasta Policial del Perú
Año IV, No.41, Setiembre 1935.
AñoIX, No.101, Setiembre 1940.
AñoXIX, No.205, Julio-Agosto 1950.
AñoXIX, No.207, Setiembre-Octubre 1950.
AñoXXIX, No.267, Setiembre-Octubre 1960.
Revista de la Guardia Civil del Perú
Año XXXIV, No.296, Julio-Agosto 1965.
Año XXXIV, No.297, Setiembre-Octubre 1965.
Revista de la Policía Nacional del Perú
Año 1, No.3, Diciembre 1989.

Santa Rosa de Lima Clonología, por Basílica Santuario de Santa Rosa.
El Comercio
1924 Agosto, 1926 Agosto, 1928 Agosto, 1944 Agosto.
Variedades
1920, AñoXVII, Agosto, Setiembre.
1924, AñoXX, Agosto.
Cultura Peruana
Vol.IV, N°17-18, año IV, nobiembre de 1944
Carta Pastoral que el Iltimo. Mons. Emilio Lissón Arzobispo de Lima, Lima-1918, Imp. de los Huérfanos.

参考文献

Armas Asín, Fernando
2000 “El Amigo del Clero” y “Signos”, dos publicaciones significativas en la Iglesia peruana del siglo XX, *Anuario de Historia de la Iglesia*, año/vol.IX, pp.319-327, Universidad de Navarra Pamplona, España.
Basadre, Jorge
1983 *Historia de la República del Perú,* Editorial Cientifica, Lima.
Castro Arenas, Mario
1973 *La rebelión de Juan Santos*, Carlos Milla Batres, Lima.
Durando Florez, Luis
1993 C*omprendio Historico del Perú Tomo VI – La República: 1900-1993*, Editorial Milla Batres, Lima.
Flores Araoz, José
1995 Iconografía de Santa Rosa, *Santa Rosa de Lima y su tiempo*, Banco de Crédito del Perú, pp.213-302, Lima, Perú.
Glave, Luis Miguel
1998 *De Rosa y espinas - Economía, sociedad y mentalidades andinas, siglo XVI*, IEP y Banco Central de Reserva del Perú Fondo Editorial, Lima.
Graziano, Frank
1999 *The Millennial New World*, Oxford University Press, New York.
2002 Santa Rosa de Lima y la política de la canonización, *Revista Andina no.34*,pp.9-45, Lima, Perú.
Guerra Margarita

1984 *Historia General del Perú. XII*, Editorial Milla Batres, Lima, Perú.

Hampe Martinez, Teodoro

1998 *Santidad e identidad criolla - Estudio del proceso de canonización de Santa Rosa*, Centro de Estudios Regionales Andinos "Bartolomé de Las Casas", Cuzco, Perú.

Hansen Leonard

1895(1664) Vida admirable de Santa Rosa de Lima patrona del Nuevo Mundo, Tipografía el "Santísimo Rosario", Lima.

Herrera José

1964 *Mons. Emilio Lissón y Chavez: obispo de los pobres,* Ed. La Milagrosa, Madrid.

Hidalgo Jorge

1983 "Amarus y Cataris: aspectos mesiánico de la rebelión indígena de 1781 en Cusco, Chyanta, La Paz y Arica", *Revista Chungará N°10*, Marzo, Universidad de Tarapacá, Arica-Chile.

Iwasaki Cauti, Fernando

1993 Mujeres al borde de la perfección: Rosa de Santa Maria y las alumbradas de Lima, *Una partecita del cielo: la vida de Santa Rosa de Lima narrda por Don Gonzalo de la Maza a quien ella llamaba padre*, pp.71-110, Editorial Horizonte, Lima, Perú.

Klaiber, Jeffrey L.

1977 *Religion and Revolution in Peru 1824-1976*, University of Norte Dame Press, London.

1992 *The Catholic Church in Peru 1821-1985*, The Catholic University of America Press, Washington, D.C., USA.

1996 (1988) *La Iglesia en el Perú,* Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, Perú.

2002 Iglesia Católica y poder político en el siglo XX, *La Religión en el Perú al filo del milenio*, pp.87-108, Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, Perú.

Nieto Velez, Almando

1981 La Iglesia Católica en el Perú, *Historia del Perú Tomo XI*, pp.419-601, Editorial Juan Mejía Baca, Lima, Perú.

Millones, Luis

1988 *El Inca por la Coya - Historia de un drama popular en los Andes peruanos*, Editorial Hipatia S.A., Perú.

1989 En busca de Santa Rosa: reflexiones en torno a una biografía duradera, *Bulletin of National Museum of Ethnology 14(4)*, pp.891-905, Osaka, Japan.

1991a Los años oscuros de Santa Rosa de Lima, En M. Lemlij y L. Millones (eds.), *El umbral de los dioses*, pp.121-162, Biblioteca Peruana de Psicoanalisis, Lima, Perú.

1991b Los sueños de Santa Rosa, En M. Lemlij y L. Millones (eds.), *El umbral de los dioses*, pp.163-181, Biblioteca Peruana de Psicoanalisis, Lima, Perú.

1992 Los indios de Santa Rosa: la población aborigen a través de los ojos de los bienaventurados, *500 años de mestizaje en los Andes, Senri ethnological studies ; no.33*, pp.101-112, Nacional Museum of Ethnology, Osaka, Japan.

1993 *Una partecita del cielo: la vida de Santa Rosa de Lima narrada por Don Gonzalo de la Maza a quien ella llamaba padre*, editorial horizonte, Lima, Perú.

Mujica Pinilla, Ramón

1995 El ancla de Santa Rosa de Lima: mística y política en torno a la Patrona de America, Jose Aroz et al., *Santa Rosa de Lima y su tiempo*, pp.54-214, Banco del credito del Perú, Lima, Perú.

2001 *Rosa limensis- Mística, política e iconografía en torno a la patrona de América*, Instituto Francés de Estudios Andinos, Lima, Perú.

Ponte Gonzales, Alfonso

1965 *Con el Perú adentro:Relato de un viaje por 4 continetes desde el Rimac hasta el Nilo, del Nilo al Jordán y del Jordán al Rhin*, Editorial Thesis, Lima, Perú.

Spalding Karen

1984 *Huarochií: an Andean Society Under Inca and Spanish Rule*, Stanford University Press, Stanford, California.

Szeminski Jan

1993 The Last Time the Inca Came Back, in Gary H. Gossen, ed., *South and Meso-American Native Spirituality: From the Cult of the Feathered Serpent to the Theology of Liberation*, Crossroad, New York.

Valverde Benjamin

1921 *Album Grafico del Centenario – Recuerdo historico de todas las ceremonias y actuaciones patrioticas fiestas sociales, etc., realizadas en Lima* – Galeria de Presidentes del Peru.

Vargas Ugarte, Rubén

1959 *Historia de la iglesia en el Perú Tomo II(1570-1648)*, Burgos.

1986 Lisson Emilio, *Diccionario Hitórico y Biográfico del Perú Siglos XV- XX, Tomo V*, pp.250-251, Editorial Milla Batres, Lima.

2004 *La Flor de Lima Santa Rosa*, Asociaciones de Hijas de San Pablo, Lima.

Wuffarden, Luis Eduardo y Perez, Pedro Gubiovich

1995 Esplendor y religiosidad en el tiempo de Santa

Rosa de Lima, *Santa Rosa de Lima y su tiempo*, pp.4-51, Banco del credito del Perú, Lima, Perú.

アンドラーデ・グスターボ
1994 「ラテンアメリカにおけるカトリック教会と国家」、G・アンドラーデ、中牧弘允編『ラテンアメリカ宗教と社会』、pp.103-134、新評論、東京。

上谷博
1998 「ペルーにおけるインディヘニスモの展開」、石黒馨、上谷博編『ラテンアメリカが語る近代』、pp. 160-180、世界思想社、京都。

国本伊代
1977 「ペルーの近代化とナショナリズムー軍部による改革への道」、増田義郎編『ラテンアメリカのナショナリズム』、pp.87-114、アジア経済研究所、東京。

辻豊治
1983 「ペルーインディヘニスモの形成と展開ー1920年代インディヘニスモ論争をめぐってー」、『ラテンアメリカ研究年報』No.3、日本ラテンアメリカ学会
1993 「アプリスモと反米ナショナリズム」、歴史学研究会編『南北アメリカの500年第4巻ー危機と改革』、pp.94-111、青木書店、東京。
2000 「20世紀前半の南アメリカ　第3章ペルー、ボリビア、チリ」、増田義郎編『ラテン・アメリカ史II』、pp.320-334、山川出版社、東京。

バルカルセル・ダニエル（染田秀藤訳）
1985 『アンデスの反乱ー独立の先駆者トゥパク・アマル』、平凡社、東京。

乗浩子
1998 『宗教と政治変動ーラテンアメリカのカトリック教会を中心に』、有信堂、東京。